kotonoha
miyu

はじめに

はじめまして。

miyuと申します。

この本は今までに私が撮りためた写真に、
それを見て感じた言葉をのせただけのシンプルな内容です。

シンプルではありますが、
心の力を抜きたい時に、ゆっくり見て頂きたい本です。

風にのせて。言の葉にのせて。
日々の想いを綴りました。

それでは、どうぞ。

miyu

輝き

世界が輝いて見えるかどうかは

自分の心が決める

どこにいても
だれといても

あなた

静かな空気を身に纏って
貴方と過ごす時間は
それはそれは幸せで
それはそれは大切なものでした

さくら

桃色付いた街路樹を通り過ぎて見つけた
雨上がりの重たい空は
あの日　共に見ていた景色と似ていて
あの頃を思い出していた

風で揺れる木々の葉は僕を呼び
木々の葉を揺らす風は君を呼んだ
そしてこの場所で

僕らは十分すぎるくらい大人になっていて
少しの背伸びもしなくなった
覚えていますか
桜が咲いたらば 会おうと誓ったことを
またこの場所で

確か喫茶店の苦めのコーヒーが苦手だった

朝の澄んだ空気が好きだったし
猫が捨てられていると ほうっておけなかったでしょう　ほら
春風吹く思い出の場所は呼ぶ
今がそうその時なのだと呼んだ
そしてこの場所で

僕らは十分すぎるくらい大人になっていて
少しの背伸びもしなくなった
素顔のままで 桜色の頬を 笑顔で弾ませながら

掛け違えたボタン

うまく笑えないな
君以上が見つからなくて
時間が感じさせてくれるのは
重くなった身体だけ

掛け違えたボタンを外す術はなかった
すれ違いのサインを見逃してしまった
間違いなく僕に原因があると思った
否応なくただただ立ち尽くすしかなかった

季節は変わっていくのに

僕はまだボタンを掛け違えたままの服を羽織っている

うまく笑えないな 君以上が見つからなくて
時間が感じさせてくれるのは 重くなった心だけ

あの時に巻き戻れたらなんて考える
ボタンは間違えないように全部色を変えるよ

薄着の季節を迎えるのに
僕はまだボタンを掛け違えたままの服を羽織っている

うまく走れないな
君を想えば想う程
暑くなっても脱げないのは まぎれもない未練だろう

うまく笑えないな
君以上が見つからなくて
時間が感じさせてくれるのは
重くなった身体だけ

どれだけ季節が巡っても
僕はまだボタンを掛け違えたままの服を脱げないでいる

幸せはシャイボーイ

幸せは目に見えるものではないので

人はそれを必死に探してしまいがちだけれど

目に見えないものは案外すぐそばにあって

いつもの通学路や
寄り道先の雑貨屋さんや
早起きした朝の散歩道や

コーヒーの湯気の中や
陽に照らされた街路樹や
小さな公園のブランコの上や
家の窓からこぼれる明かりに

気づかないところで
気づきもしないタイミングで

それは見つからないようにひっそりと
あなたに寄り添っている

見つからないようにしているのは

見つけてしまうと

もうそこで終わりだと思ってしまうから

幸せはシャイボーイ

その香りはタイムマシーン

しばらく忘れていた
引き出しの奥に閉まっていた

小さな小物入れ
映画チケットの半券
ベタだけど四つ葉のクローバー

あの時の香りがやってきて 私を引き戻す
その香りはタイムマシーン
今は違う香りを纏い 私を変えていく
振り返りたいのか 洗い流したいのか
もうどっちでもいいのだけれど

一度思い出してしまうと 夢で見た記憶　香りが消えてくれない
あの時の香りがやってきて 私を引き戻す
その香りはタイムマシーン
今は違う香りを纏い 私を変えていく
その香りはタイムマシーン

鎧

その鎧を捨てて

もっと自由になればいいのに

こんなに気持ちいい風が吹いていて
こんなに眺めがいいのに

視野を広げるということが

あなたをもっと

羽ばたかせるのに

あたりまえのしあわせ

私達はこうして立っていて
私達はこうして生きている
何気ないことが大切で
何気ないことが幸福(しあわせ)

あなたには地について歩ける２本の足がある
あなたには母の肌に触れられる２つの手がある
あなたにはしっかりとものを見られる瞳がある
あなたには声や歌が聞こえる耳がある
あなたには想いを伝えられる口がある

これは 当たり前に持っているものじゃない
これは 贈り物だ

∞㎞

確かなものをこの手にしたくて腕を伸ばした
僕の背が低すぎるせいか
君の存在が遠すぎるせいか
この手は空を仰ぐばかり
ああ　僕がもう少し大人だったら
背伸びするくらいじゃ届かない
名前を呼ぶくらいじゃ聞こえない
あとどれくらいだろう
この距離は
単位にすると∞㎞

遠くまで暗雲の海
曇り空は悲しくなる
たくさんの孤独を知った
僕が手を伸ばすには晴れた空の方がいい

ああ僕がもう少し大人だったら
背伸びするくらいじゃ届かない
名前を呼ぶくらいじゃ聞こえない
あとどれくらいだろう
この距離は 単位にすると∞㎞

おとなとこども

いつまでも子どものままだね　と 言った私が大人になれないこと
貴方は分かっているのでしょう
だから言い返さないのでしょう
優しさと無関心をはき違えてる

ありがとう

ありがとう　という言葉を聞いた

その度　心を思い出す

激動

TVのニュースで知ったこの世界の変動
状況の規模が大きすぎて 耳に入っては抜けていった
とんでもない世の中にいるもんだな俺達
事態が飲み込めずただただ 日々を過ごしてる奴だらけ

悲しいもんだな 他人が他人のふりをして すれ違いを恐れない
「だったら何だ？」「俺には関係ない？」
これでもまだ「寂しい」と嘆くのか！

事態は悪化している
ますます取り上げるニュース
キャスターもどこか無関心 このままじゃ駄目だと言うが易し

強くなってるのは意識だけ
そこで終わらせたらなんの意味もない！

叩き起こそう
自分を　他人を　この世界を
傷つくのを恐れない
手を取り合おう 大きく声を上げよう
そこから始まるものは世界を揺さぶれる！

顔色も髪色も違うのが そもそもなんの問題があるのか！

叩き起こそう
自分を　他人を　この世界を
傷つくのを恐れるな
手を取り合おう 大きく声を上げよう
そこから始まるものは世界を動かせる！

アイスクリーム

「アイスクリームが嫌い」

と誰かが言った

あの人を思い出すからと
口に残る冷たさが
あの時の目の冷たさと重なると

いつも食べ物は人を 幸せにするだけではないのだと
私はその時感じたのだ

偶然

夢を見たんだ

この広い世界で

偶然　君を見つける夢を

探して探して見つけたわけではないけれど

僕は神に感謝をしたいくらい

この偶然に歓喜したんだ

優しい嘘

あなたのために
優しい嘘もつけない
こんなことなら初めから
傷付けないさよならもあったのに

二人の思い出は
もう届かないところへ
二人だけで見たもの
儚い沫になっていく
十分すぎたあなたの愛

苦しいくらい受け止めた
それでも来る終わりに
私の心は涙も声も受け止めきれずに

あなたのために
優しい嘘もつけない
こんなことなら初めから
傷付けないさよならもあったのに
岐路に立って
振り返ってみる道を
涙で歪んだまま見つめて
後にも先にも進めない気がした
次に会うとしたら
心も距離も離れて
消していた記憶だけが
静かに波打つでしょう

ごめんねと言えたら楽になる？
優しい嘘もつけないのに
あなたを思うとただ
私の考えなんて浅はかで卑怯で汚いの